

9. 環境研地域協力担当として、そして地域住民として過ごした日々

平成5年から10年余にわたり環境研の地域協力担当を務められ、退職されてからも六ヶ所村に居住され地域住民として、一貫して環境研と地域を活動の場に、科学振興、女性科学者、女性文化活動の啓蒙をキーワードに、息の長い活動を続けられている荒谷美智先生から寄せられた回顧録をここに掲載し、今日の地域共創に繋がる草創期の活動を俯瞰する。

女性科学者の会・ソロプチ・作文教室

荒谷 美智

六ヶ所村文化協会

読書愛好会 編集担当



創立30周年、心よりお慶び申し上げます。

私は平成5年9月1日満60歳を迎え、勤め先の理研では年度の前半に生まれた者は9月30日が退職日、9月29日に人事課長に連れられ羽田から飛び環境科学技術研究所を訪問しました。使用済み核燃料の再処理工場が出来ると、がん・白血病になる、奇形児が生まれるなどデマで住民の方々が怖れているので、核・放射線に関する正しい知識を広める仕事というお話でした。核化学研究室所属で、その前は東大核研ですから《60歳まで核・放射線の仕事をしても元気なヒトの見本になるワケだ》と納得、勇躍お受けしました。3年のお約束でした。ただ、赴任の日が11月17日に遅れました。当時、科学技術庁長官が山東昭子氏で全国の原子力発電所や建設予定地に講演に行かれるのですが、前座の者が一人お付きで行くことが通例になっていて、私が11月前半に随行する予定になっていました。これは、不安に思う地域住民の方々に接するという意味では役に立ったと思っています。

三沢の飛行場近くに宿舎を与えられバス通勤が始まりました。職務は「地域協力担当」、村内・近隣市町村の学校を訪問、文部省が推進する「理科離れ是正で環境研がお手伝いします」という主旨なのですが、週休2日制への移行もあって学校には自由時間が無く、いくら説明して廻っても暖簾に腕押し、理科室も見せて戴きましたが、物置同然、埃だらけという散々な有様でした。

偶々読んだエネルギー・レビュー誌で、二本柳晴子さんという県婦人少年室帰りの女性活動家が平沼にお住まいで、書道教室を開いておられると知り、辻理事とお伺いし事情を話したところ「協力させていただきます」と、トントン拍子に進み、ご本人の他、石川とみゑ氏（保健協力員協議会副代表、助産師、看護師）、工藤和子氏（南部裂き織りグループ代表）、菊池トシエ氏（女性団体連絡協議会会長）、の女性団体リーダー4名の方々が環境研を訪問、大桃所長、小牧管理部長から直接説明を受け、環境研を見学、地域協力事業にご協力いただけることになりました。平成6年4月21日のことでした。そして、以後、村内の様々な団体の環境研見学が増え、村の社会教育課木村課長、寺下総括主幹、新山指導主事との交流が頻

繁になりました。

工藤和子氏のお宅が引っ越され、六原の旧宅が久しく空き家になっていると知り、村内活動の拠点として荒谷が借り受ける方向で話が始まりました。三沢市に住んでバス通勤では、六ヶ所村のことが何にも分からないのではないかと、思うようになっていたのです。これは、翌年5月連休に実現しました。この件に関心を持って下さった女性の方々が3日に集まり、屋内の大掃除や庭の草取りなど環境を整備、コスモスの種を撒きました。日本原子力文化財団の塚崎佐智子氏も参加され、楽しい一日でした。石川とみゑ氏の後のセリフによれば、私共の活動は「スワニーも無く名も無く六原で始まった」のでした。この頃六ヶ所村文化協会設立の話が盛んになり、文化交流プラザスワニーが完成すれば、ユーザーの主体団体になるとのこと、劇場・会議室・図書館の併設で寺下総括主幹としては、それまで在ったサークル、絵画・写真・書道・舞踊・茶道などに、本を読むサークルも加えたい、名称は読書愛好会、代表は二本柳晴子氏、人選は代表一任、環境研の地域協力担当荒谷も関与して欲しいとのご意向でした。地域協力担当では村の方々に読んでいただきたい関連図書の予算もあり、渡りに舟とお受けしました。

二本柳晴子代表は、会員になるよう呼び掛けた方々のお顔合わせを六原の工藤邸で開くこととし石川とみゑ氏、菊池トシエ氏、庄内の酪農家佐藤登喜氏、伊藤夏子氏、平沼の美容師野坂和子氏がお出掛け下さいました。こうして平成7年7月8日、中央公民館二階大広間で六ヶ所村文化協会設立総会が、泊の芳柳流柳美扇州師による祝舞で盛大に開催されました。会長は教育委員長であった千歳平の小林昭男氏、この日は読書愛好会発足の日でもあります。環境研の笹川澄子博士も会員になられ、ご相談しながら「六ヶ所村文化協会読書愛好会会誌」創刊号を8月20日に出すことが出来ました。

定年前、放射化学討論会という学会で研究発表をしてきましたが、毎年夏には専門的に個別の学校が各地で開催され、平成8年には八戸の八戸ハイツで「核化学夏の学校」が開かれ、懇親の部に二本柳晴子氏、菊池トシエ氏、野坂和子氏をお招きし、校長格の東京都立大学中原弘道教授、理研矢野倉実研究員、全国からの専門家に加え、大学院生、学部学生など未来の学者の卵たちも含め、親しく交流していただきました。

日本には女性の科学者も少なからず居られることは知っていましたが、日本女性科学者の会 SJWS なるものがあるのを知らず、理研入所の途端、理事で放射線研究室の大塚秀子研究員から「理研では女性研究者は全て SJWS 会員」と勧誘され、何だかよく分からないまま会員に。当時の名称は「婦人」科学者の会で、丁度、国際「婦人」年とかで理研女性科学者の人的割合の歴史的変遷の調査を依頼され、その後、理事に、定年まで会員でした。六ヶ所赴任に際し、放射線医学総合研究所主任研究官宮本霧子博士に後を託し、仙台の東北支部長、鈴木益子博士（東北薬科大学教授）、同じく東北支部理事熊野伸子博士（東北大学加齢医学研究所）に「今後、東北支部会員になりますので宜しく」とご挨拶申し上げました。平成8年12月1日、両博士が来村され、泊の東京旅館で六ヶ所村女性団体の方々と盛大に交流、これをきっかけに鈴木・熊野両博士も読書愛好会会員になられ、村民や村在住・勤務でなくても主旨に賛成して入会する会員＝遠隔地会員というカテゴリーの会員が規約に銘記され、以後、多くの専門家・市民が全国から会員になられ、読書愛好会の間口が広がったのでした。

これより先、六ヶ所村赴任に際し大学の同窓会名簿で、青森中央短期大学の佐藤はま教授のお名前を知り「六ヶ所村の核燃施設誘致にあたり住民・環境安全のための調査・研究を行

う環境科学技術研究所に首都圏より赴任した」旨、お手紙を出しておきました。平成8年に入り教授より「同窓会を青森市で開くので仕事の紹介を」との主旨のお電話、それとは別に「青森市に月1回出てくる時間的余裕は？」とのご質問があり、漠然と月1回佐藤教授とお目にかかれるものと「飲んでお伺いします」とお答えしました。

それから間もなく国際ソロプチミスト青森の對馬和子さんという方からお電話で、「佐藤先生からのご紹介ですが、男性のロータリークラブ・ライオンズクラブに当る社会奉仕の女性クラブ国際ソロプチミスト青森（以後ソロプチと略）の会長をしている者です。月1回青森に来られる由、入会のお勧め」とのこと。国際的な全国組織なら首都圏にもあったのに「私は全くの実験室人間でよくわかりません」としかお答え出来ませんでした。その後、お電話や資料送付が続々とあり、熱意にほだされた形で、よく分からないまま入会。理研のSJWSの時と同じ構図でした。

会社社長職の会と思っていたところ、入ってみれば管理薬剤師、医師、看護師、臨床検査技師、再処理工場に物を納めているような会社の技師、大学教授、社長職でも前看護師、前学校教諭、前水産技師はじめ、前銀行員、前東北電力社員、前NTT技術系社員など多士済々、入れていただいて本当によかった、と感謝。そして、SJWS東北支部鈴木支部長、熊野支部理事と六ヶ所村の読書愛好会員が、村内泊地区館で文部省「親と子の理科教室」事業を、ささやかながら懸命にやっているのを見て、先ず、野辺地川上病院の管理薬剤師川上とせ氏がSJWS東北支部第一号会員として入会、また青森市の歯科医師長内侑子氏も入会、学校時代からの親友むつ大畑の楨さち歯科医師を誘って、六ヶ所村泊地区館での親と子の理科教室事業に、度々ご来村されました。

その後、ソロプチ会長が津島園子氏に替わり、平成9年5月9日、原燃PRセンター、再処理工場、環境研、郷土館の見学後、文化交流プラザスワニーで交流、同年10月11日、文部省女性の社会参加支援推進事業による大会「考えよう地球環境 ～エネルギー基地最前線から～」が文化交流プラザで、読書愛好会主催、日本女性科学者の会共催、国際ソロプチミスト青森の協力で盛大に開かれました。この会にはSJWS会長、ニュートリノ物理学者で東邦大学教授数野美つ子博士、帝国石油役員手塚真知子博士が来村、八戸短期大学教授三村三千代氏も来賓としてご出席、文化交流プラザスワニーの柿落しとして相応しいものとなり、舞台での講演会、大会議室ぶち抜きの実験ブース、各種団体の展示ブース、農林水産業など他地域の関連産業団体まで含めた展示など60近いブースがひしめき、1日では見終らないと言われました。特筆すべきはソロプチ大和知子氏の再処理工場に納入と同じ実物大の配管類の展示でした。舞台は生田流箏曲教授で原子力文化財団の塚崎佐智子氏他2名による合奏で幕開け、総合司会は菊池トシエ・熊野伸子・川上とせの3氏、午後は、津島園子氏のピアノ、笹川博士のチェロ伴奏で、縄文時代から栄えた六ヶ所村を讃える詩が朗読されました。

平成10年には、長内侑子氏が、学校歯科医を長年されてきた奥内宮田の清岸寺三宝学園あすなろ幼稚園で、文部省「親と子の理科教室」事業を「母と子の科学教室、文部省女性の社会参加支援推進事業、日本女性科学者の会ミニサイエンス、青森」と銘打ってSJWS、ソロプチ、読書愛好会の三者合同で大々的に開催。目を輝かせた園児たちのアップ写真が河北新報や東奥日報に掲載されました。

当時、青森市内では、さる著名人が自由が丘のお屋敷で、文化・芸術事業を大々的に開催、話題をさらっていました。長内会員から「あの会合には県上層部の方々もお見えになると評

判です。文部省予算による SJWS 親と子の理科教室事業についてお知らせしたいので観桜会を開くよう段取りしました。環境研 SJWS のお二人は、幼稚園での子供たちの写真など資料を持って、自由が丘に来るよう」ご連絡がありました。当夜は晴れ、市内幼稚園の保母さん方のグループが多く、噂の通り県上層部の方々もお見えで、満開の桜の下、資料をお渡し出来ました。暫くして、県からお二人の担当官が環境研に来られ、県は「青少年の科学する心育成事業を開始するので協力するよう」お話がありました。以後、毎年、夏休みに「あおり青少年科学セミナー西暦年号、都市名大会」という名称の一大科学行事が、県内諸都市廻り持ちで開催されるようになり、平成 15 年から「サイエンスフェア（開催年）in（開催都市名）」と名称が変更、計 10 年間継続、都市としては、青森（1999）、青森（2000）、弘前（2001）、むつ（2002）、青森（2003）、八戸（2004）、弘前（2005）、十和田（2006）、青森（2007）でした。

平成 11 年夏には青少年科学セミナーが青森公立大学で開催。有馬文部大臣が来青、ハカセのいで立ちで登場、お話と演出でヤンヤの喝采。ソロプチの對馬和子氏が「酸・アルカリについて ～酸性雨を理解する基礎～」でリトマス試験紙を使って熟演、笹川博士は金属棒で作った不思議な形の色々な構造物で丸くないシャボン玉作り。参加者が多く、翌日八千人と報道されました。

以後、毎年夏になると、愛好会も SJWS もソロプチも関係者はこの行事のためいろいろ工夫したもので、私は文部科学省の「一家に 1 枚周期表」とベータちゃんを使った放射線測定、笹川博士はお薬草とも関連する植物の標本つくりをされました。特筆すべきはソロプチの内海文子氏（鳥の観察が趣味でアカゲラについての著書あり）で、SJWS 賛助会員になって下さったばかりでなく、小鳥さんの巣箱を毎年多数寄付して下さいました。不幸にして早逝されましたが、3 年後小鳥さんが初めて入ったと報告がありました。

平成 14 年 5 月、長内侑子氏は、SJWS 会員として地域の歯科医療の傍ら青少年の科学活動を促進し本会の発展に寄与した、との功績で 2002 年度第 7 回功労賞を受賞されました。長内侑子氏の活動を地域でつぶさに観ていた鈴木益子博士が東北支部長として強く推選されたことに拠るものです。

平成 14 年 7 月、長内侑子氏は夏だけの大々的な行事でなく、青森市でいつでも手弁当的に集まって学ぶ青い森科学 BBL を始められました。生涯教育に繋がる県民カレッジにも対応するもので、BBL とは Brown Bag Lunch の略、コンビニでも買える手軽な昼食のこと、前年むつ市で行なった青少年科学セミナー「環境とエネルギーの基礎」を青森厚生年金会館で再現しました。

平成 15 年 11 月 16 日、それまでの活動を纏め「生涯教育における科学教育」と題し東京一ツ橋学会館における SJWS 学術大会で発表しました。工藤美智子、釜菴テイ、對馬和子、内海文子、荒谷美智、長内侑子の連名でした。この日、對馬和子氏は、会場に来る途中、マラソンで高橋尚子選手に出会ったとのこと、話題になりました。

平成 19 年 4 月、あおり県民カレッジ連携機関青い森・科学 BBL「宇宙における核現象による放射線のための科学実験教室」がひらめき工房アジレント（旧横河電気）2007 助成プログラムに入選（団体：代表 長内侑子）しました。同年 12 月 25 日、読書愛好会は県知事賞「青少年の『科学する』心育成大賞」を受賞しました。3 団体合同による活動の賜でしたが、SJWS・ソロプチは有志の参加でしたので、こういう形になったのでしょうか。

二本柳代表は、親と子の科学教室にも熱心でしたが、それにも増して「六ヶ所村からの発信」に力を入れていました。大都会の人々にとっては、本州最北端の下北半島は“サルとカモシカ位しか住んでいない所”なので核燃施設のようなものができて当然。しかし、そうではなくて、「此処もヒトの住む里だ、と書いて発信しなければ到底分かってもらえない」と常々述べ書かれていました。そして荒谷も、文理両刀の寺田寅彦博士の「何かやっても書かかなければ、やったことにはならない」との言葉を信条に過ごしてきたので、読書愛好会会誌を大切に思っていました。会誌創刊から一年経った時、笹川博士は『六ヶ所村女性たちの発信』として A5 判の本に編集、刊行され、図書館に配布、会員は希望の冊数を分担し、親戚・友人・知人に配布しました。会員は初め、書く与自己がアカラサマになって恥ずかしいと中々投稿しませんでした。代表も私も、そうではなくて、「書かないと誰にも何にも伝わらない」と勧め、代表は「暮らしのこと」「思いの丈」を書くように言われました。本は、笹川博士の定年まで続き、その後は会が村の予算に応募、荒谷と熊野博士が会誌を一冊に綴じる簡易編集で今日まで継続しています。

文書的発信に加え、日本のエネルギーにおける六ヶ所核燃施設の役割について読書愛好会は、県内各地は元より東京シンポジウム・仙台シンポジウム（2014）、御前崎でのエネの会・名古屋 Ene☆Eco Wing・読書愛好会三団体交流会・むつシンポジウム（2015）を主催。平成 27 年 12 月 17 日二本柳代表急逝、平成 28 年 8 月 18 日、臨時総会開催で読書愛好会新体制菊地トシエ新代表、松本とし・澤谷幸子両副代表で発足、放射線教育フォーラム郡山国際シンポジウム参加発表（2016）、名古屋シンポジウム・高レベル放射性廃棄物（以後 HLW）意見交換会札幌（2017）、平成 30 年 9 月 3 日、むつシンポジウム「知りたい」下北半島地熱エネルギーの源（2018）、11 月 1 日、東京一ツ橋如水会館における原子力立地地域全国大会 2018 は、基調講演 元文部大臣で理論核物理学者有馬朗人氏、津島衆議院議員もお見えで、エネルギー問題と風評被害特集鼎談で菊池トシエ代表が唯一地域住民らしい語りで満場に感銘を与えました。11 月 11 日、内閣府 ImPACT ワークショップ「HLW の大幅減量・資源化」がマネジャー藤田玲子博士のもと、スワニー大会議室で行われ、関連する多くの専門家が見えていましたが、地方の女性でこんなに発言が出来る団体は見たことがない、と驚かれました。

令和元年 6 月 6 日、中央公民館ホールにおける六ヶ所村女性団体連絡協議会総会で、日本原燃株代表取締役社長増田尚宏氏による「福島第二発電所ではあの日何が起こったか ～東日本大震災時の経験を踏まえて～」と題する基調講演とグループ討論で深い感銘を受けました。11 月 1 日、県立六ヶ所高等学校の第 2 学年対象の「実は身近なエネルギー ～暮らしとエネルギー～」出前授業は、彼らの祖父母の時代「村論二分・家内二分」の激論で核燃施設誘致に踏み切った動乱の歴史を彼らに知らしめたい、という代表の強い動機に端を発しています。幸い日本立地センターの予算で実施でき、生徒 60 余名の意見として A4 用紙 11 枚の感想を聴けて成功と感じました。1 年置いて 2 回目を行い、3 回目には島田義也理事長に基調講演をお願いできました。少子化で成人式が 2 年早まるなど、時代の要請に鑑み今後共続けていくことになるでしょう。

初めの 10 年余は環境研地域協力担当として、後の 19 年は地域住民として過ごした日々、ご協力いただいた多くの方々のお働きを伝えたい一心で書き記しました。貴重な機会を与えていただきありがとうございます。

令和 5 年 1 月 19 日記す